ISSN 0582－4478

京都大学附属図書館報

静脩

1988年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 3

図書と学術情報

理学部教授　川那部　浩　哉

『静脩』前号では，朝尾直弘教授が「図書館と博物館」と言う題で書いておられる。今回は私に，何か学術情報に関係したことを書くようにとの依頼があった。前号を横においてそれを眺め，それをなぞりながら，何か書くべく努力してみることとしよう。

「図書館は〈書物〉を扱い，博物館は〈物〉を扱う」。これは自明のようである。それでは〈学術情報〉は本来，どこでどのように扱うべきものか。　いやそもそも，〈学術情報〉と〈書物〉との関係はどうなのか。

一般的な考えは，おそらく次のようなものであろう。「従来，学術情報は専ら書物のかたちで収集されてきた。しかし技術の発展に伴い，書物のかたちにはならない学術情報がたくさん現れて来た。マイクロフィルム・映画・ビデオ・コンピューターディスクなどは，その典型例である。つまり，今では学術情報は，書物という形式を持ったものはもとより，それ以外のさまざまな形を持ったものを包含するといっそう広い概念である」と。真にもっともな意見である。

だが私は，あえて違うところから出発してみたいと思う。すなわち，朝尾さんが「第一次資料である〈物〉」を，「図書のように人間の頭の中を通過し，整理して発信された二次的な情報」と，とりあえず対置しておられるのに，先ずはなぞらえるところから始めてみたいのである。

私の見るところでは，学術情報自体にも同様に，一次資料的なものと二次資料的なものとがある。国勢調査による地域別・性別・年齢別人口統計表等というのは，一次資料に近いだろう。新しく発明された機械についての性状の説明図などもそうであろう。自分の仕事にもう少し近いところで言えば，ある海域におけるプランクトン(浮遊生物)の地点別・層別・種類別分布表などもそれに入る。この一番最後のものは，原子力あるいは火力発電所などの建設・維持に関連して，近年著しい量の資料がさまざまの所で集められていると聞くが，全く公開されていないらしい。もったいないこと，夥しい話である。それはともかくとして，こういうものは，それが〈図書〉のかたちで出されようと違ったかたちで出されようと，意味には変わりがないわけであって，その点，一括して考えるほうが相応しいのではあるまいか。

二次資料と，いちおう考えられているものにも，実はいろいろのものがありそうだ。いわゆる学術

論文と言われるものの中にも，比較的一次資料に近いものもあるし，どう考えてもそうでないものもある。ある決まった機械で，あることを測定した結果がとにかく書かれているといった論文もたくさんあるが，これはどちらかと言えば一次資料に近いだろう。ある動物の行動が克明に記載してあるものも，もしそれだけのことであればこれに入る。悪口好きの人間はこれを〈論文〉とは言わず，〈報告〉あるいは〈報告書〉と呼ぶことにしているようだ。万一間違って受け取る人があるといけないから，急いで付け加えれば，これは真の意味の報告書を論文よりも価値が低いと言っているわけではない。

本当のところは少し違うような気がするのだが，あえて早判り的に言うならば，上に述べた一次資料的なものだとか〈報告書〉のたぐいは，事実が間違っていれば何の意味もないし，後でそう解ればそのときその価値はまずまずなくなってしまう。それに対して上に言った意味での〈論文〉は，後に事実にいくらかの誤りが発見されたとしても，「微動だに」とは言わないが，ある価値を持ち続ける。その得ようとする結果に至るまでの過程なり，得られた結果をいかに考えたかが，その後の人間の思考に重大な影響を及ぼし，したがってそれこそ，科学の発展に寄与し続けるからなのである。

〈学術情報〉という言葉には，こう考えてくると，少なくとも三つの意味が存在するのではないかという気がして来る。一つは，先に述べたような書物という形を持ったもののみならず，その他さまざまの形式を持ったものを含めた，総称とする用法である。二つめはここで述べて来たような広い意味であって，つまりその中に広く一次情報的なものと二次情報的なものとを含めた，これまた総称と考える用法である。ここまでは，今までのおさらいだ。しかし巷間，学術情報を第三の意味，すなわち専ら一次情報に近いものを特定するかのように使う例もあるような気がする。これはあるいは，〈情報〉という言葉自体に時に付きまとう，何かうさん臭い感じと関連があるのかもしれない。

もし，この私の感じにいくらかでも当たっているところがあるとすれば，学術情報にはこの第二の用法と第三の用法とのあることを，先ずははっきりと知っておく必要があるのではないか。つまり研究・教育の発展にとって，一次情報的なものと二次情報的なものとは互いに違った意味で，しかし同等に重要なのだという，ごく当たり前のことを改めて認識することである。

「何をいまさらのように，馬鹿なことを言っているのか」と思われる向きもあろう。だがこれを曖昧にしておくと，たとえば次のようなことが問題になって来はしないか。

今，極めて多量の一次情報的なものを特に強く必要としているのは，〈急速に進歩している〉分野である。よその国の学位申請論文（いわゆるセージス）などについても，それが正式の論文になるのを待たず，直ちにあるいはできるだけ早く見たいものだと思う研究者は数多い。ついでに言うと，いくつかの国での特にいま〈発展〉している学問領域では，学位申請論文自体が一次情報に限りもなく近くなっている。ところでこういう場合の一次情報的なものの多くは，数年をたたずして役割を果たしてしまう。学術雑誌の中にも，こういう言わば使い捨てめいたものがかなりあり，続々と新しく刊行されている。そしてそれは，短い期間はやはり必要なのである。逆に言えば，ある期間がたつとそれは全くと言って良いほど不必要になってしまうのだ。

しかし一次情報的なものの中には，永遠に必要欠くべからざるものもある。発掘の克明な報告書などはその典型例だろう。私に近いところで言えば，生物の新種の報告なども，すぐに判ってもらえるこの例である。こういうものは，むしろ時代が立つにつれて益々重要になってくることが多い。

そして，次にほんものの論文がある。発表のときはごく少数の人にしか読まれなかったけれども，ずっと後までも，それを引用することなしには学問の進まぬというものは，意外に思われるかもしれないが，少なくともいくつかの分野ではいまでも数多いのだ。中には，古典として後の世まで引きつづき読まれ，専門以外の人にまで多くの影響

を及ぼすものもあろう。

「こうしてみると」,〈図書〉のかたちを採っているかどうかにかかわりなく，一次情報的なものの扱いと二次情報的なものの扱いには，明確な「機能分掌」があっても良いのではないかという考えが，「浮かび上がってくるのである」。前者については数年毎に検討がなされ，集められたものの大部分は破棄されて，一部分だけが永久保存されるかたちに移されても良い。そして後者については，言うまでもなく永久保存が最初からの前提になる。

さらに言えば，前者に関してはそのとき大学に研究者のいないものは無視しても差し支えないが，後者に関してはおよそ学問・研究に関係のあるものについては，そのときにそこに専門の研究者がいようがいまいが，総て収集しておくというのが原則でなければならない。

図書館がこの二つをともに扱うことは，それはそれで良いであろう。しかし，扱い方は全く違うべきではないのか。そしてこれは，科学の，いや，学問研究全体の在りかたについていろいろ考えなければならない問題自体とも，いくらか似ているような気がしている。みんなで，こういう「関係を議論しておくことも大切なことと思っている」のである。　　（1988年11月12日）

≪「特殊コレクション」巡り≫　④

本草学関係文献紹介

本　草　文　献

薬学部教授　田　端　　守

薬学部図書室に所蔵する特殊コレクションの最たるものは本草文献であるが，その紹介に先立ち，本草書の歴史について簡単な解説を加えておく。「本草」という呼称は漢の時代から用いられ，「薬は草を本にする」ことが語源といわれている。事実，本草書が収載する薬品の大半は植物性の生薬であるが，動物・鉱物性生薬をも多数含むので，その内容は漢方医学で使用された天然薬物全般に及ぶ文献であるといえる。

最も古い本草書は，後漢の頃に成立したといわれる「神農本草経」（著者不明）であるが，後に陶弘景（452—536）が伝承薬物を365品（上薬120，中薬120，下薬125）に整理してそれぞれの性状と薬効を記録し，これに自ら選んだ他の薬物 365 品を加えて「本草経集注」7 巻を著わした。この撰書が後世の本草文献の基礎となり，唐の高宗の時代（659）にこれを改訂増補した勅撰本「新修本草」（850品目，原本存在せず）が刊行された。後者の写本の一部（5 巻）は，国宝として仁和寺に保存されているが，その写真複製本が薬学部にある。

宋代になると，新修本草に薬物や文献の附加，改訂が次々と行われ，陳蔵器の「本草拾遺」10巻（739）をはじめ，勅命による官製本「開宝重定本草」(974)，「経史証類備急本草」(1091— 3)，「経史証類大観本草」(1108)，「政和新修経史証類備用本草」(1116)，「紹興校定経史証類備急本草」(1159)，「重修政和経史証類備用本草」(1249) など，いわゆる証類本草が続々と編纂された。収載された品目の数も改訂につれて増加し，上記の大観本草では1746品を数える。また記述も詳しくなり，各薬物の気味，薬効，別名，分布，採収・加工，参考文献の抜萃，調剤・投与法などを総括している。

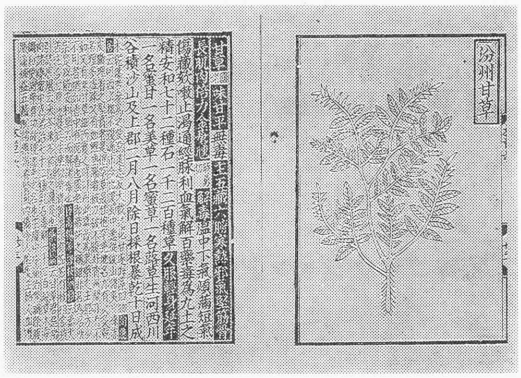
明代に至ると，李時珍が独自に著わした薬物大百科辞典「本草綱目」52巻（1590）が出版され，薬品数は1890余種に達した。この初版（金陵本）を1607年に林道春が入手してのち，その飜刻本が日本国中に流布して貴重な文献となり，本草家，医家に多大の影響を与えたのである。

上述した中国の本草文献は，2000年以上にわたる中国人の経験に基づく薬物知識を集積した宝庫であり，世界に比類がない巨大な文化遺産であるといえよう。

一方，漢方医学を伝承した日本においては，主に江戸時代に入ってから，中国本草書の復刻本や注釈本を見るほかに，人見必大の「本朝食鑑」（1677），貝原益軒の「大和本草」（1708），独自な薬物論を展開した香川修徳の「一本堂薬選」3巻（1729）や吉益東洞の「薬徴」3冊（1771）など優れた著作が出版され，さらに1803年には，本草学から博物学への発展を示した小野蘭山の大著「本草綱目啓蒙」48巻が刊行されるに至った。また，薬用植物の写生図としては，世界に誇るべき原色植物大図鑑である岩崎常正の大作「本草図譜」が1828年に完成されている。

ところで，薬学部が所蔵する本草関係書物は，中国（107点）及び日本（336点）で刊行されたものを併せて約443点を数え，全国でも有数のコレクションであり，薬系大学ではこれに優るものがないと思われる。ここでは紙数の制限上，56点を選んで以下に掲載し，読者の参考に供することとする。なお，各書の説明については，岡西為人著「本草概説」（創元社，1977）などを参照されたい。

本コレクションのうち，木村康一教授が生薬学講座のために入手された柯氏本大観本草は，朱墨のにじんだ新しい版の美しいものであり，貴重な資料である。また，富山藩主前田利保編「本草通串証図」5巻（1853）は精密な邦産薬草彩色図を収めた美麗な貴重書である。



本草書は，和漢薬の研究にとって不可欠な文献であるとともに，伝統薬物から新薬を発見，開発する上で最も貴重な情報源でもある。漢薬の考証並びに科学的研究にとって，先人が苦心惨憺の末蒐集した薬学部の本草文献の存在価値はきわめて大きい。今後も完全な保存に努力する必要があるが，死蔵に終ることなく，医学・薬学の研究に活用されることを望むものである。

巻懐食鏡　香月牛山
　京都　茨城多左衛門等合刻　明和3（1766）
冝禁本草　曲直瀬道三（玄鑑）
　杉田良菴開板　元禄13（1700）
冝禁本草集要歌　巻4～7
　延宝7（1679）
救荒本草　正補合併　周憲王
　附　救荒野譜　王西楼
経史証類大観本草　唐慎微
　柯逢時序　光緒30（1904）
経史証類備急本草　王継先等
　東京　春陽堂　昭和8（1933）
広群芳譜　佩文斉
　康熙47（1708）
古方薬品考　内藤尚賢著　生島泰良校
　平安　文泉堂　天保13（1842）
質問本草　呉継志（子善）撰　曽愿校訂
　天保8（1837）
重修政和経史証類備用本草　唐慎微
　曹孝忠等校正　成化4（1468）
袖珍本草雋　平住専安遺書　松岡玄達鑒定
　宝暦5（1755）

植学啓原　宇田川榕菴
　風雲堂　天保 6 （1835）
植物名実図考　呉其濬著　陸応穀校
　道光21（1841）
食物本草・日用本草　李東垣編
　京都　山屋治右衛門　慶安 4 （1651）
諸州採薬記抄録　植村政勝（左平次）
新修本草　巻15獣禽部
　大阪　本草図書刊行会　昭和12（1937）
新修本草　仁和寺本新修本草残巻 5 冊
　大阪　本草図書刊行会　昭和11（1936）
神農本経
　大阪　泉屋卯兵衛　寛保 3 （1743）
神農本草経　丹波元堅
　嘉永 7 （1854）
神農本草経疏　繆希雍
　天啓 5 （1652）
神農本草経百種録　胎洄溪
　躋寿館聚珍版　享和 3 （1803）
斉民要術　賈思勰
　嘉靖 3 （1524）
千金翼方　景元大徳本　孫思邈
　光緒 4 （1878）
草本図説（新訂）　飯沼慾斉
　明治 7 （1874）
本経序疏要　鄒澍
　道光20（1840）
本経逢原　張璐（路玉）
　康熙34（1695）
本草衍義　寇宗奭
　光緒 3 （1877）
本草滙　郭佩蘭
　江戸　山田長右衛門　元禄 6 （1693）
本草原始合雷公炮製　李正宇
　乾隆51（1657）
本草綱目　江西版　李時珍
　萬暦31（1603）
本草綱目　李時珍著　稲生若水校
　京都　唐本屋八郎兵衛　正徳 4 （1714）
本草綱目啓蒙　小野蘭山
　京都　林喜兵衛　享和 3 （1803）
本草綱目拾遺　趙学敏
　同治10（1871）
本草従新　呉儀洛
　乾隆22（1757）
本草述　劉若金
　嘉慶15（1810）
本草述鉤元　楊時泰
　同治11（1872）
本草序例（改正新刊）　加藤宗乾
　京都　聚文堂　寛永16（1639）
本草図譜　山草部・芳草部　岩崎潅園
　江戸　須原屋茂兵衛　文政13（1830）
本草図譜　岩崎潅園
　東京　本草図譜刊行会　大正 5 ～11（1916～22）
本草通串　正宗敦夫
　東京　日本古典全集刊行会　昭和12（1937）
本草通串證図　前田利保（萬香亭）等
　嘉永 6 （1853）
本草摘要
　京師　西村喜兵衛板　元禄10（1697）
本草備要　汪昂（訒菴）
　京都　植村藤治郎　享保14（1729）
本草品彙精要四十二巻　劉文泰
　民国26（1937）
本草和名　深江輔仁
　江戸　和泉屋庄次郎　寛政 3 （1791）
本朝食鑑　平野必大
　元禄 5 （1692）自序
薬籠本草　香月牛山（貞庵）
　享保19（1734）
大和本草　貝原益軒
京都　永田調兵衛　宝永 6 （1709）
用薬須知　松岡玄達（恕菴）
　翠栢堂　享保11（1726）
用薬須知　松岡玄達（恕菴）
　前編　享保11（1726）　後編　宝暦 9 （1759）

東洋学文献センターにおける
中国関係データベースの作成

東洋学文献センター(人文科学研究所)では，手作業で編集していた『東洋学文献類目』を1981年度版より電算機を利用して作成するようになった。その後，更に，自動簡体字入力・繁体字出力システムの開発により事務の能率化が進み，近年は類目作成の余力で現在，中国学関係の三データベースを構築中である。以下，その概要を説明する。

① 人文研所蔵中国書目録データベース

従来より編成している人文研カード目録では著者，書名の画数からしか検索できないなど少々不便であった。このデータベースでは，書名，副書名，著者名，叢書名等の繁体字項目，画数項目のみならず，当用漢字，拼音，四角号碼の項目を作り，いろいろな角度からの検索を可能にした。来年1月より，文献類目データペースと共にセンター閲覧室設置端末による代理検索サービスを開始する。

② 日本所見中国叢書目録データベース

『中国叢書綜録』に記載のない叢書で日本に現存するものを，全国の主要漢籍所蔵館（京大，東大，内閣文庫等（16館）の目録から拾い出した李鋭清氏の原稿をデータベース化するものである。親データ，子目データの階層があり，それぞれの書名，副書名，著者名等について，やはり繁体字，画数，当用漢字，拼音，四角号碼の項目を設け，多角的に検索できる。

③ 近現代中国人物別称データベース

中国人は伝統的に別称をよく用いるが，近現代では政治的理由なども加わり，ひどい時は一人で百以上別称を持つ者も現れ，別称により人物を同定することがますます困難になった。そのため，センターでは人文研教官を援助し，多数の人名辞典伝記資料をもとに，近現代中国史研究者にとって大変な福音となる別称の総合的データベース構築に協力している。①・②同様，見出し，姓，諱，別称，籍貫，生没年等のデータのうち，見出し，姓，諱，別称には，繁体字，当用漢字，画数，拼音などの項目を設け，どこからでも検索できるように作られている。

（森賀　一恵）

「外国学術図書」の利用案内

10月1日より，昭和62年度補正予算（文部省配当）により購入した外国学術図書が利用できるようになりました。

本誌で既にご紹介したとおり，各学部の教官に推せんいただいた国際的に評価の高い図書を巾広く収集しました。総数約6,500冊のうち，整理が済んだ図書から順次，附属図書館2階・開架閲覧室に配架しています。

貸出しは，他の開架図書と同様，図書館利用証を添えて1階メインカウンターへお持ち下さい。

多くの方々の積極的な利用をお待ちしています。

貸出冊数：5冊（他の開架図書とあわせて）

貸出期間：2週間（更新1回可能）

霊長類研究所図書室の別刷収集について

霊長類研究所図書室ではサルに関する学術論文の別刷を集めている。1988年11月現在約33,500点になり，充実を喜ぶと共に置き場所の確保に悩まされるようになってきた。この別刷収集を始めてから10年余りになるが，どういういきさつで集めることになったのか，どのような方法で集め，整理し，利用しているかを紹介したい。

1977年といえば霊長研10周年も間近，霊長類研究の陣容はすでに整っていた。しかし，サル学唯一の総合的研究機関と言われながら，図書室はその特色をほとんど反映していなかった。霊長類学という単一の分野があるわけではないし，サルに関する文献資料がもともと少ない上に，予算上の制約のためさし迫って必要なものしか購入できなかったからである。蔵書数でいえば，図書約3,100冊，製本雑誌1,600冊，合計約4,700冊であった。この年，図書室の機能向上について所内から二つの提案があった。

ひとつは，誰もが使えるようになってきたコンピュータで市販のデータ・ベースの情報を呼び出そうというもの。これは独自にサル関係文献のデータ・ベースを作ること，既存の資料をマイクロ化すること，その機械検索システムを作ることを含み，ライブラリー・オートメーション時代の到来を前提に考えられた。当然新たな人員を必要とする案であった。もうひとつは，従来それほど力を入れていなかった別刷収集を見直し，現状の人員のままで別刷を早くたくさん集めることで乗り切ろうというものであった。

「無形の情報」か「有形の別刷」かは，図書室の作業の機械化か手作りかであるばかりでなく，図書室のなりたち，使われ方の転換にかかわる。一度踏み切ったなら，多少の不都合があっても元へもどすことはできない。選択は慎重でなければならなかった。とりあえず別刷収集のウエイトを増し，機械化についても断続的に検討するという期間がしばらくあった。

ちょうどその頃，霊長研の情報委員会では関西のある大学図書館を訪れて，開発途上のオンライン文献検索システムを見学することになった。この見学は参考になった。何ケ月も大学に詰めっぱなしのメーカーのエンジニアがソフト作りに専念していたが，図書館の理念や図書館の作業手順や資料の性質や研究者の要求のタイプ更には研究領域ごとの資料の使われ方の違いなどを検索式の構造に盛り込むことは困難のようだった。いくつか試してもらった検索過程と結果とからも，当分の間機械検索は霊長研図書室には縁の薄いものであると思われた。限られた予算を機械の運転に費やすのではなく，資料そのものを手に入れたいということで所内の多くの意見も一致した。こうして別刷収集が本格的になった。

ワシントン大学の霊長類情報センターが発行している月刊リストには，サルに関する学術論文の書誌事項と著者の住所が載っている。これにもとづいて著者に航空ハガキで別刷寄贈を依頼することになった。応答率はずっと85%ほどだが，数の上では110%になる。注文以外の論文も同封してくれるからである。カードは，リスト所収の論文すべてについて作り，第一著者のＡＢＣ順に排列する。別刷が到着したら，カードと現物に受入順の同一番号を付し，現物は受入順にキャビネットにしまう。リストがカバーしている学術雑誌は学問の全分野にわたり，現在約1,200タイトル。サル学界の現況はほぼ把握できる。

鏡に見入るチンパンジーの赤ちゃん　生後３ケ月

また同センターではリスト上の論文を40余りの分野に再編成したパンフレットも発行しているの

で，あるテーマの論文を一覧したい時にはこのパンフレットを検索して別刷のファイルに当たる。

ここ４～５年の間に大学図書館の雑誌所蔵状況は大きく変化し，コピー依頼をしても購入中止のため謝絶される件数が目立って多くなった。京大内の相互利用サービスからもはずれた遠隔地の小さな図書室の方向として，サル学文献の別刷収集は，ささやかながらひとつの解を与えている。

（河田いこひ）

開架閲覧室（２階）の一部配置換

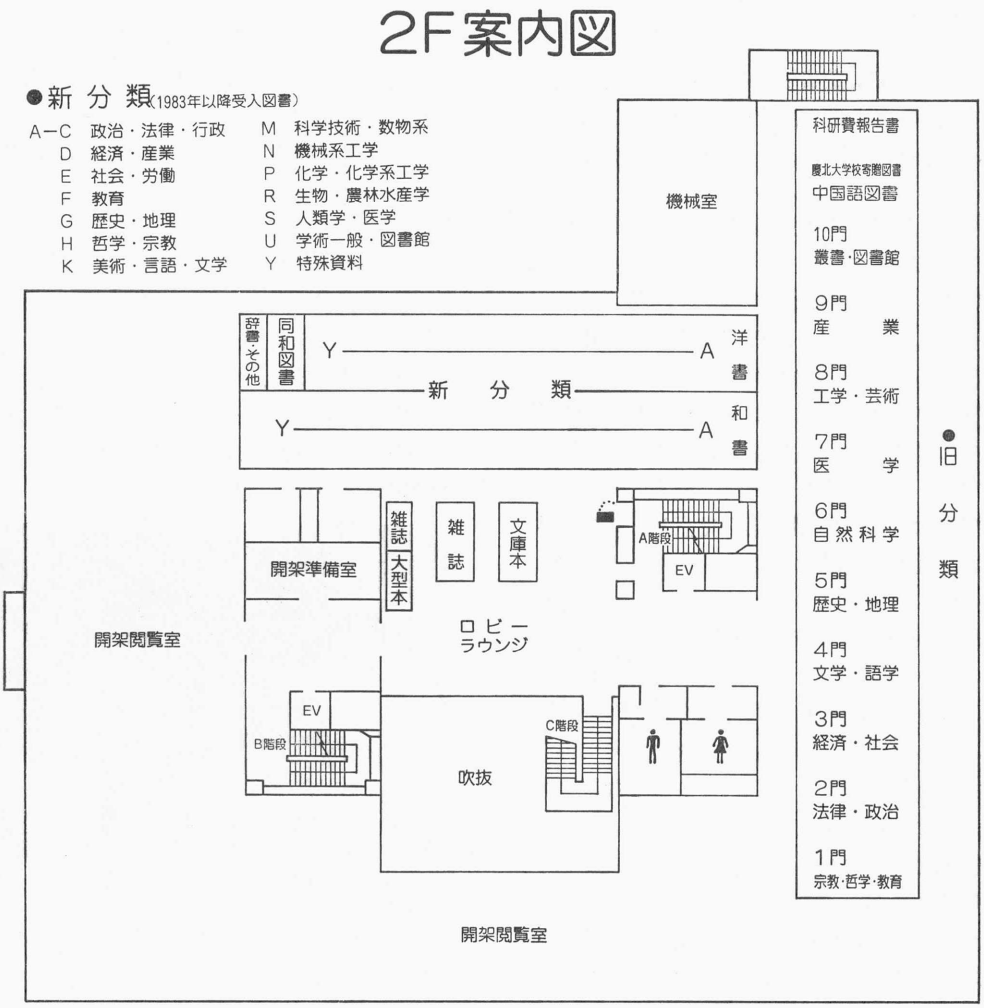
附属図書館２階・開架室の図書の配置が，以下の図のように換わりました。

配置を変えた主な理由は次のとおりです。

(1) 新たに，外国学術図書購入費による洋書を配架するため。

(2) 増加する新着図書（新分類）の収納に対応するため。

(3) 利用者にわかりやすいように，利用頻度等を考慮し，資料の機能的な再配置を心がけたこと。



≪講 演 会≫

アメリカにおける大学図書館の現況について

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の講演会が去る９月21日，カリフォルニア大学ロスアンゼルス校情報図書館学部長ロバート・ヘイズ博士を招いて「アメリカにおける大学図書館の現況について」という題目で開催された。通訳は図書館情報大学教授松村多美子氏がつとめられた。この講演会には近畿地区の20を超える大学などから80名余りが参加した。

概要：今回の講演は1986年のＩＦＬＡ（国際図書館連盟）東京大会でヘイズ博士が発表した“ＵＣＬＡの研究図書館における情報源に対する戦略的計画”がこの２年間でどの程度進展したか，更にこれからの見通しなどを中心になされた。

現代の図書館の直面する問題は様々あるが，その中でも大規模な研究図書館のマネジメントの問題が最重要であると思われる。例えばテクノロジーの進歩につれて多種多様な情報源（Information resources）が出現して来ているがそれらをどう管理して行くかといった問題である。

上記の“戦略的計画”というのは Council on Library Resources の資金援助によりＵＣＬＡの各学部・学科で具体的にどの様な情報源に対する要求があるかを調査し，これからの研究図書館のあり方について検討し一つのモデルとなるものを提供しようとするものである。これまでの調査から出て来た多様な情報源に対する要求は狭義の（伝統的）図書館の資料のみではなく，印刷物，フィルム，数値データ，ディジタルデータなど殆んどありとあらゆる情報源を含んでいる。これらの要求を全学的見地から，更には外部との関係を含めてどう取り扱うかという事を検討する段階に来ている。その場合，現在の図書館の在り方もまさに“戦略的”に検討される事になろう。

≪主題別研究集会≫

大学図書館のレファレンス・サービス

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が，10月７日附属図書館３階ＡＶホールにて行われた。講師は慶応義塾大学三田情報センター情報サービス課長の東田全義氏で，17の国公立大学図書館から95名（うち京大は66名）が参加した。

まず，最近の大学図書館をめぐるトピックについて，最近とくに注目を浴びてきたＩＬＬ（図書館間相互貸借）実施上の問題，特に本来受付側の事情が配慮されるべきところを，依頼者側の都合が優先されてきたこと，去年から今年にかけて，利用者教育に関する研究会が盛んになっており，単なるオリエンテーションでなく，専門課程の学生をも含めた図書館の利用技術に重点を置いた学生集団への利用者教育として位置づけられている。

次いで，レファレンス・サービスにおけるインタビュー技術が，オンライン検索の導入により，その重要性が再認識され始めたが，日本では，このレファレンス・インタビューに関する研究の蓄積がほとんどなく，研究テーマにもなかなかなりにくいことなどが，紹介された。

そのあと，オンライン・データベースについて，同じ単語でもその表記方法で検索結果の異なることが実例によって示され，同義異形，同語異義，類義語，概念の上下関係などの点で限界があり，「従来の検索よりもよくなっていると思わないほうがいい」との指摘であった。

次に，書誌学との関係にはいり，最近クローズアップされてきた目録の遡及入力の項目決定に書誌学の知識が必要であるとし，書誌の二つの役割のうち，Information（情報）と Identification（識別）について，両者がレファレンス・サービスとどのような関りがあるのか，について考えたいと前置きして，モンテスキューの「法の精神」とルソーの「エミール」の原書の本版や偽版の標題紙の相違を，細部にわたって比較検討した。また，京大に実際に所蔵されている原書も実物を示

しながら，どの版に相当するのか推理し，参加者からは，その緻密さにため息がもれるほどであった。

最後に，最近，東田氏の受けた質問を紹介しながら，こうした古典の原書については，とくに版の指定の必要なことが強調された。

≪シンポジウム≫

学術情報システムと ローカル目録システム

11月17日(木)～18日(金)の両日，緑深い北摂の山懐にある関西地区大学セミナーハウスで第２回国立大学図書館協議会シンポジウムが定員30名を超える35名（35大学）の参加を得て開催された。今回のシンポジウムでは，メインテーマを「学術情報システムに対応した最適のローカル（各大学図書館）システムは何か」とし，以下の４つのサブテーマごとに検討を加え，特にＶＴＳＳ方式により学術情報センターと接続し，目録情報の作成，ＯＰＡＣ（Online Public Access Catalog）を推進していこうとしている中小規模の大学図書館システムの在り方を探求することに主眼がおかれた。先ず最初に，今年６月に出された国立大学図書館協議会　学術情報システム特別委員会ネットワーク委員会第２次報告「目録情報ネットワークの展開と大学図書館のシステム化」の概要について報告が行われ，引続き，サブテーマごとに２日間にわたる熱心な討議が行われた。各サブテーマにおける討議概要は次のとおりである。

サブテーマ１：学術情報センター目録・ソフトウエア（ＵＩＰ）

学術情報センターへの登録とデータ取込みまでの取込み方法等ソフトウェアの特徴等について，各メーカのコンピュータを導入している大学からの事例報告を中心に比較検討が行われた。

サブテーマ２：学術情報センター目録情報とローカルシステム目録情報

ローカルシステムに取込む情報量（必要な項目と不必要な項目の切り分け）及びパッケージソフトの有効利用の必要性等について討議が行われた。

サブテーマ３：ＯＰＡＣの性能

①NACSIS-IR との関係におけるＯＰＡＣの必要性

②CD-ROM によるオンディスク検索との関係

③ＯＰＡＣのシステム効率　等について活発な意見交換が行われた。

サブテーマ４：ハウスキーピング

システムの範囲，効率，システムへの負荷を考慮に入れ，ハウスキーピングのシステム化の現状及び問題点（課題）について検討が行われた。

以上のように今回のシンポジウムは，昨年（第１回）の経験を踏まえて，①テーマを１つにしぼったこと。（テーマに関して専門の人が参加し得た）②合宿方式を採ったこと（参加者間のコミュニーケーションの機会が増えた）等により，終始和やかなうちにも活発な議論が交わされ，実りの多いシンポジウムであった。

≪懇 談 会≫

情報検索・電子メールシステム に関する利用者との懇談会

学術情報センターは，情報検索システムと電子メールシステムの改善とサービスの向上を図るため，全国４地区で利用者との懇談会を開催した。

このうち，近畿地区では，12月８日に本学図書館の地域共同利用室を会場として行われ，９大学から22名の参加があった。

当日，学術情報センターから，各サービスの現状紹介，実演，利用者の意見・要望について報告の後，懇談にはいり，情報検索サービス(NACSIS-IR) 及び電子メールシステム (NACSIS-MAIL) の諸機能・性能，データベースの内容，運用等について話し合われ，活発な意見交換がなされた。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 25, No. 3（通巻91号）1988年12月24日発行・編集：静脩編集委員会（責任者 附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・☎ 075—753—2613